

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語 (29)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後藤 寛

日本の学校機関で算数・数学のように英語も音声面を含めフェイク（偽物）ではない、本当に正しい、真なること、本質的なことが学ばれているだろうか。自己満足的(self-pleased)に、これでよしとされていることはないだろうかなどと考えることがよくある。2 + 2 = 5 (That is not true.)が true だとすると算数・数学はすべて壊れる。英語はあまり無理をする必要はない。根本的に呼吸法の違う片言英語で外国人に短い一言疑問文（平叙文ではなく）を投げかけ、あとはほとんど彼らにしゃべらせるだけでは大して意味はないわけで、他に多くの科目もあるなか、当然ながら一般大多数の日本人には英語も教養的なものとなる。

日本人は学力・知識の基本となる算数・数学すら義務教育として英語で受けるわけではない。日本の学校機関では英語は文字として読むこと(reading)、音声として聴く／聞くこと(hearing/listening)を介し内容のあることを受動的に理解することが中心になる。伝統的な方法が背伸びをしない穏当なものである。また事実上、日本ではそれしかできないはず。これは学会では日本英学史学会の通説でもある。ただ、もう少し要領のよい手早い方法・コツが示唆されてよい。これも所詮は学ぶ側の志があつてのこととはなる。本格的には本国での生活体験となるが、そういう例はごく少数である。

今回も書かれたり、話されたりする英文が理解できる(able to make it out)ことを念頭に置き考えていく。英文理解には当然ながら背景に知識(knowledge)も必要となる。

(1) Hope you are enjoying your President's Day, our Country is making unprecedented progress! (February 18, 2019)

▲「大統領の日」の祝日を享受して欲しい、米国は前例のない発展をしつつある、という内容であるが、文中の President's Day は一昨年は、2月18日(月)がこの日であった。元々が初代大統領 George Washington や、第16代大統領 Abraham Lincoln が2月生まれで、毎年2月の第3月曜日が「大統領の日」と定められたと言われている。

太線の語 unprecedented (前例のない) は、本連載(9)の冒頭で見た造語 unpresidented (大統領らしくない) とはスペリング上は ce と si の違い、音声上は [si] [zi] の違いのみで音環境によっては無声子音[s]も有声子音[z]も同じように聞こえもするが、別系統の語である。

本連載(9)で「Trump氏が unpresidented (大統領として不適任)であり、辞任し White House を早急に去る」という fake news を扱ったが、実はその直後に「これは unprecedented (前代未聞)なことである」という意味の2つを掛けたものでもあったらしいことに気づいた。造語 unpresidented は unprecedented を下敷きとした語に思える。さらに実はその後、*Unpresidented: A Biography of Donald Trump* とタイトル付けられた書 (Martha Brockenbrough 著、2018) も存在することをネット上で知った。

unprecedented は {un (= opposite) + pre (= before) + ceded (= going)} と要素分解できるが、Basic 語 **process, necessary** と同系であるし、形容詞のプラス α Basic 語 *accessory* (副次的な)、*successive* などとも同系である。また、un-Basic 語では procedure, success, access などが同系 [本連載(9)の(1)、および拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(107)参照]。

なお、音声面でプラス α Basic 語 *president* の語尾 dent は、早口になったりすると声門閉鎖

音(glottal stop) 化もし[dnt]ともなる点には注目されておいてよい。

(2) Michael Cohen was one of many lawyers who represented me (unfortunately). He had other clients also. He was just disbarred by the State Supreme Court for lying & fraud. He did bad things unrelated to Trump. He is lying in order to reduce his prison time. Using Crooked's lawyer! (February 27, 2019)

▲ 2016年の大統領選でのロシア介入疑惑に絡み、偽証・詐欺等の罪でニューヨーク州最高裁判所から弁護士資格を剥奪された Trump 大統領の元顧問弁護士 M. Cohen は、下院の公聴会 (public hearing) で改めて大統領の不倫相手への口止め料支払いなどに関し、Trump 大統領のことを “He is a racist, he is a con man, and he is a cheat.” 「彼は人種差別主義者で、いかさまで、ペテン師だ」と証言・表明 (represent) した。この場面はテレビでも放映された。

この tweet では Trump 氏が「Cohen 被告は私には関係のない悪事をし、彼は刑期を短くしようと嘘の証言をしていて、いかさまの (Crooked's) 弁護士をつけている」と言っている内容である。ここでの Crooked とは crooked person として Hillary Clinton を指しているのだろう。

文中の太線語 who に関しては本連載(18)の(2)で扱ったが、改めて触れておきたいことがある。Basic 語の真の意味と使い方を教示しようとする GDM (Graded Direct Method) で、which とは別に他の関係詞 who (whose, whom), when, where などの取り扱いはどうなっているか? である。

日本の GDM 実践での関係代名詞 which など anaphora (照応関係) 語の扱いは、今日的には N. Chomsky 風の transformational grammar (変形文法) の見方そのものでもあり特別なものではない。ただ、これも身体で覚え使えるためには F. Saussure 風の数学的な structural linguistics (構造主義言語学) での langue (ラング) と parole (パロール) の parole として、習慣 (habit) 化と体系 (system) の内在化 (internalize) を目指した反復 training が当然必要となる。

なお、英語の Wh-語など (5W's & 1 H) は、手話言語 (sign language) の人工言語体系からも何かとヒントが得られる。ASL (American Sign Language : アメリカ手話言語) や ISL (International Sign Language : 国際手話言語) の方法などの中にいくつも自然言語を考えるヒントがあり、たとえば文 What is your name? などの be 動詞は ASL では sign として存在せず単に Your name what? に相当する手・指による 3 種の signs を示し、眉 (まゆ) を下げる。Pidgin English (ピジン英語) を思わせるが、情報としては十分伝わる。語では雑多な同義語 (類義語) を排除する考えなども手話言語が何かと思索上の参考となる。

代名詞や副詞の **who, which, what, when, where, why, how** の 7 語はすべて印欧祖語 (PIE) の語根音素形 /KWO/ に由来し、共通な root sense (原義) は「知識のために問い求めること」である。他の Basic 語 **question, request, quality, equal** など、un-Basic 語 conquest, require など同系語 (paronyms) を一括しすべて本質的で共通な意味を感じ取っていくのがよい (equal といえば算数・数学は = か ≠ かを問い求める)。音声的には基本的に [w] 音をもっている。[w] 音をもたない who と how も文字としては w を残している [同上拙著、第二部、例(56)参照]。

EP 本が人間の I, you, he, etc. を振り出しにするのなら「近いものは近づけよ」で関係代名詞 which より who の導入が先でもよいはずだろう。行為 (what) をめぐって周囲状況を問い求める副詞 where と when であれば導入はどちらが先か? EP 本で真っ先に here/there を導入するのなら、やはり空間の where が先の順序が理屈的によい。筆者が米国で研究中に読んでいた言語習得 (language acquisition) に関する言語学者の一論文中で、幼児は時間の When did you see it? と聞かれても、Where did you see it? と聞き間違えることがあるという箇所に出くわしたことがある。EP 本では where を Bk I の p.38、when を p.65 の順で導入するが頁がかなり飛んでいる。how は Bk II の p.14 での初出である。5 W's & 1 H は近づけるのが手早い。

なお、5Ws & 1H [特に who (人間・存在者)、what, when, where (行為)] は、本会 *Year Book No.72* (2020)の拙稿で見た衣食住の衣と関わる構造主義言語学的なモード・ファッション言語の記号体系・パターンを知る上でも1つの要となる見方だと言えることは特記しておこう。

EP本の全面的な改編・再編成版(試案)が構想されてもよからう。大きな研究テーマの1つとなる。ここでの提示順序・構成法は普遍的なものか?算数・数学などの段階式な Grade とは違い、言語の Grade 提示は一筋縄ではいかない。そもそも DM の D にはネイティブ並みの本物の英語力も要求されるが、さらに G が頭に付く GDM での G の「段階」とは何か? Harvard 大学の I. A. Richards など Basic 哲学の専門研究者たちが試みた実践は多分成功したのであろうが我流のきかない、中途半端ではない、完全さが求められるところが難しい。

本会研究会誌等を介し、GDM が内輪ではなく外部からは専門性の点で指摘・批評されもする (GDM の専門性云々は内輪では以前、片桐会員も同じように評されたことがある) が、研究としての専門性欠如はもちろんまずい。教授法 M の効能は Basic 哲学を核に意味論的・科学的に示され、検証される必要がある。主観的印象・感情の随想的提示では和風もので、INO (In Name Only)付きの GDMINO [dʒiːdiːemínou / dʒiːdiːemáinou] とも評される。また、GDM では英語だけが「話される」などというのはまったくの幻想的誤解で、これは P. Grice が提唱し広く知られる conversational maxims 「会話の公理」の基準などからも大きく外れる。

フランスの R. Barthes は *Système de la mode* 『モードの体系』(1967)の中で「意味劇場(the theater of meaning)」(英語翻訳版)というコトバを用い上記モード・ファッションの視点から記号論(semiotics)を説いている(プラスα Basic 語 theater は Basic 語 theory と同系)が、EP本は意味劇場の幕間のファルス (farce : 狂言的道化芝居・茶番劇)の風味・趣がある。これは自修用に向く Basic 意味論のプレ入門書で、マインドコントロール(洗脳)書ではない。扱い方には要留意である。日本では日本人の日本人による日本人のためのものとはなるが、断続的・単発的ではなく体系(system)として実践教示するのに時間もかかるるとすると the shortest way とは裏腹に、the longest way of teaching English となり学力低下の問題も秘めている。

EP本では、たとえば対語 **be / seem** は前者は am, is, are 形で Bk I, pp. 4-5 で真っ先に提示 (was は p.15、be は will be 形で p.35、were は p.39、been は扱われない)、**same** とも同系語の後者 seem は Bk II の p.103 での初出。本連載前回に見た **in / out** は各々 p.11 と p.63 での提示で近づけられてはいない。論理の展開語 **and / but** は各々 p.23 と p.38 での初出である。また、**why/because** は Bk II で because が先に p.55 で提示、why が後の p.67 での扱いとなる。そして EP本での最初の Basic Qualities [Basic 性質語(形容詞)]はモノの位置づけでの人体の部位(手)の左右指定 **right / left** [手は右→左] (Bk I, p.13)、次がモノの状態で窓の開閉状態 **shut / open** [窓は閉→開] (Bk I, p.26)、次に人体の部位で目の **open / shut** 状態 [目は開→閉] (Bk I, p.40)の扱いで、いわゆる形容詞はこれらを振出しに展開する。他に反義語など識別関与的2項対立関係(binary opposition)での提示順の妥当性等々、一々説くとどうなるか?

Gの思索には、一昨年の本会発行 *Year Book No. 71*(2019)の拙稿中で提示した EP本(Bks I・II)における「**Basic 語提示順一覧(早見表)**」は、巻末索引との併用で手早く必ず役立つはずのものだろう。将来的には大学院後期博士課程の学生や修了者など若手研究者による Basic 意味哲学(orthology)から G が追究され、論文・口頭での研究発表が続々となされるとよい。同義語(synonym)・反義語(antonym)と共に、同系語(paronym)への注目が1つあるが本連載で考えているような Basic 語を発生的に同系のものはできるだけ一括提示がよいことは明白で、やはり「近いものは近づけよ」である。一例で、**again** と同系語の重要な空間詞 **against** は EP本では Bk III を含めまったく扱われない [本連載(15)の(1)参照]。Basic 語の原義(root sense)を教示

しようとする EP 本であるが、「同系語」という観点からはバラバラな配置ということになる。

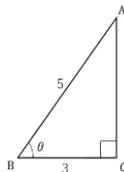
ただし、たとえば Bk I, p. 51 の文例 *This is his body. This part of him is his chest. This is a chest of drawers.* で、Basic 語 **chest** を「(人体の) 胸部」と「(引き出しの) 箱」を意味拡張の例として提示しているがこの類のものはよい。chest の印欧祖語の語根音素形 PIE etymon は「箱」が原義の /KISTA/ とされ今日、cistern [sístə:n] (水槽・水洗トイレの貯水タンク) はよく用いられる語である。cist (= kist) の「木箱」も同系語で、定説ではないにせよ案外 Basic 語 **basket, basin** と同系なのかもしれない。また、因果律を示す重要な対語 **cause / effect** (pp. 87-88) を近づけた文例提示などは妥当である [上記 *Year Book* No. 71 (2019)、拙稿参照]。

なお、2) の tweet 文中 2 つ目の太線語 **client** (顧客) は初頭子音 [kl] の響きから「傾くこと」の意味を感知したい。clinical (臨床上の)、climate (気候) など同系語。前者はベッドへの傾き、後者は南北地軸の傾きで起こる気象である [本連載(3)、また(16)の(1)でも触れた]。

文中 3 つ目の太線語 **crooked** [krúkid] (曲がった) の初頭子音 [kr] は「ねじれていること」や「切ること」を意味する。Basic 語 **screw** など同系 [同上拙著、第二部、例(6)参照]。

冒頭で厳密な科学である数学の方法に関し触れたが、数学で定理・公式の証明法そのものが曖昧な状態で、またその証明法そのものには関心はなく、問題解きだけをしていても本来の対処法と分かり方ではないはずである。たとえば三角関数で $\sin^2 \theta + \cos^2 \theta = 1$ が真であることは、直角三角形 ABC で $\angle B = \theta$ 、辺 BC = 3 (cm)、辺 CA = 4 (cm)、斜辺 AB = 5 (cm) を例として考えてみれば $\sin \theta = 4/5$ 、 $\cos \theta = 3/5$ である。そうであれば、 $\sin^2 \theta + \cos^2 \theta = (4/5)^2 + (3/5)^2 = 16/25 + 9/25 = 25/25 = 1$ となる。確かであり、決してフェイクではない。

$$\sin^2 \theta + \cos^2 \theta = 1$$



Basic もなぜ無限の表現が可能か? である。Trump 氏の tweets もすべて Basic で言えると思うが、筆者がより興味を抱く点は無限の表現が可能となるそもそもの理論的「定理・公式」の証明とブラックボックス(black box)の解明である。長年に渡り思索はしているが、なかなか難しい。ただ、見通しはあり本連載の目指す趣旨の 1 つもこのあたりである。

概念規定の明確な Basic はまさに定義語(words for definition)としての絶対語彙(absolute vocabulary)の体系と見なしたい [その全語彙の見方の詳細は同上拙著、巻末付録(pp. 227-240)参照]。C.K. Ogden 監修の *The General Basic English Dictionary* (初版は 1940 年) は定義語の体系を如実に示すものと言える。本連載(10)の冒頭でも若干触れたが、数理的な「微積分」の考え方を導入すれば何かと解けるように筆者には思える。目下、追究中である。

特に不定積分 $\int f(x) dx = F(x) + C$ (C は積分定数) [f(x) : 言語形式、F(x) + C : 意味] で相当部分は解けそうである。不定積分での任意の定数 C (constant) が、文の意味解釈上の色合い・感情(emotional coloring)だと説明できる。すなわち、C は文化的要因・社会的通念(慣習)・人間の心理的感情(情緒)など文化の相違、また一言語から他言語への通訳・翻訳などにみるニュアンス・色合いの違いともなる。C.K. Ogden and Linguistics [全 5 巻] (1994) や C.K. Ogden 編集の *Psyche* [全 18 巻] (1995) などが参考文献となる。大枠は拙稿(2005)「生成語彙論と BASIC ENGLISH」[本会 *News Bulletin* No. 57 (pp. 16-21)]、また (同、2005)「移動事象の関数構造と高次言語 BASIC ENGLISH」[研究紀要 No. 13 (pp. 8-19)、日本ベーシック・イングリッシュ学会 (名称は当時)] などでも説いてはおいた。